

氏名	塩田 真友子
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 3953 号
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	自己と他者の顔および名前の認知プロセスの差異に関する 検討
学位論文審査委員	主査・准教授 堀内 孝 教授 多屋 頼典 教授 長谷川芳典 教授 田中 共子

学位論文内容の要旨

本論文は自己と他者の顔および名前の認知プロセスについて検討を行なったものである。本論文は全 5 章から構成される。第 1 章では、最初に、顔認知や名前認知に関して行なわれた過去の研究の詳細な展望が行なわれている。その中で、複数のモデルが紹介されているが、本論文では Burton et al. (1990)のモデルが現在最も有力なモデルとして位置づけられており、心理学的観点や認知神経科学的観点からその妥当性が検証されている。次に、自己に関する一般的なモデルを概観すると同時に、自己顔および自己名前に関する研究の現状と問題点が指摘されている。本論文では、特に、自己顔および自己名前に対する認知プロセスを詳細に検討する必要性が強く主張され、本論文の研究目的として設定するとともに、以下の章で実験法による実証的な検討が展開されることになる。

第 2 章(研究 1)では、プライミング課題を用い、自己顔と他者顔の認知プロセスの相違を検討する 2 つの実験が行なわれている。実験 1 では、ターゲットとして自己顔(各実験参加者の顔)と他者顔(女性有名人・男性有名人の顔)、プライムとして自己、他者の顔・名前と、黒い四角形(ベースライン)を提示した。各ターゲットに対する性別判断を課題としてその反応時間を測定し、プライムによる反応パターンの違いによって、自己顔と他者顔の認知プロセスの異同を検討した。その結果、自己、女性有名人、男性有名人いずれについても、ターゲットとプライムが同一人物である場合に、反応時間が短くなった。実験 2 では、ターゲットとして自己名前と他者名前を提示し、実験 1 と同様の実験を行なった。実験 1, 2 とともに自己、女性有名人、男性有名人いずれの条件においても、プライムとターゲットが同一人物である場合、ターゲットについての反応時間が促進されるという結果となり、自他の顔および名前の認知プロセスに基本的相違はないと解釈された。また、ベースラインでの自己の顔と名前に対する反応時間が最も短かったことより、自己の顔と名前は他者の顔と名前と比較して効率的な処理が行なわれていることが示唆された。しかしながら、実験 1 では、プライムが顔である場合と名前である場合においてターゲットに

対する反応時間の差は見られなかったのに対して、実験 2 ではプライムが顔である場合よりも名前である場合の方がターゲットに対する反応時間は短かった。この結果のパターンの相違を整合的に解釈するため、Burton et al. (1990) のモデルにおける意味情報ユニット内に名前情報を組み込み、意味情報ユニット内で名前と性別などの意味情報が直接リンクされた新たなモデルが提唱された。

第 3 章 (研究 2) では、自己の顔および名前の処理の効率性について、セルフ・スキーマによる解釈、すなわち、セルフ・スキーマに関する情報は注意を惹起し、効率的な処理が行なわれることより、自己の顔および名前に関してはスキマティックな処理が行なわれているという解釈が実験的に検討された。自己と有名人の顔・名前に赤、青、黄の着色を施したものを提示し、実験参加者に色判断課題を求めた。自己の顔および名前に関してスキマティックな処理が行なわれているならば、ストループ課題において他者の顔および名前よりも反応時間が遅延することが予測される。結果として、自己と他者の顔および名前に関する反応時間の差異は認められず、自己の顔や名前に関するスキーマによる解釈は支持されなかった。

第 4 章 (研究 3) では、人物の顔および名前の処理の効率性について、熟知性による解釈が検討された。判断対象人物として、段階的に熟知度の異なる人物、具体的には他者条件として有名人という熟知度の低い人物に加え、仲の良い友人という熟知度の高い人物を設定し、それらの人物の熟知性の違いによる顔・名前に対する反応時間を比較した。人物の顔および名前が熟知性の高さに応じて効率的に処理されるならば、反応時間は自己に関して最も短く、次に仲の良い友人となり、有名人に関する反応時間は最も長くなることが予測される。その結果、顔・名前ともに、自己に対する反応時間が最も短く、次に仲の良い友人に対する反応時間が短くなり、有名人に対する反応時間は最も長かった。この結果より、人物の顔および名前が熟知性の高さに応じて効率的に処理されることが示唆された。

第 5 章では、以上の研究知見を総括すると同時に、本研究で提唱されたモデルの妥当性が検討された。さらに、自己の特殊性に関して議論が行なわれ、今後の研究課題に関する展望が行なわれた。

学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、平成 21 年 2 月 18 日午前 10:00 より LL 教室にて行なわれた。参加者は、学位審査委員 4 名 (堀内孝 (主査・教員), 多屋頼典 (教員), 長谷川芳典 (教員), 田中共子 (教員)) と、聴講者 1 名であった。論文に対する各委員の意見を要約すると以下のとおりである。

人間の顔や名前に対する認知が他の物体に対する認知とは異なる特殊性を持つことは、過去の研究において明らかにされており、顔認知や名前認知に関するモデルも複数提唱されている。しかしながら、自己の顔や名前に対する認知プロセスについて検討した研究は未だ少なく、特にモデルのレベルにまで昇華した研究は皆無に等しい。そのような現状を鑑み、本論文では Burton et al.(1990)の IAC モデルを理論的な立脚点として、自己の顔および名前に対する認知プロセスについて検討を行ない、あらたなモデルの提唱を行なっている。本論文の骨子は『心理学研究』の原著論文 (第 2 章)、紀要論文 (第 3 章)、『心理学

研究』に投稿審査中の論文（第 4 章）から構成され、本学研究科の学位論文の基準を十分に満たしていると考えられる。研究の展開や論理の適用は妥当であり、特別な問題は見受けられない。本論文では新たな自己の顔と名前のモデルを提唱しており、当該研究領域に対する有益な寄与が認められる。質疑応答では、必ずしも的確な回答を得られない場面もあったが、総合的に鑑みて、審査は委員全員一致で「合格」と判断するものである。なお、今後の研究の発展という観点からいくつかの意見が述べられたので以下に記す。

第1章では、最新の認知神経科学的知見も含めた顔認知や名前認知に関する展望が詳細に記述されている。また、本論文の研究目的である、自己顔および自己名前に対する認知プロセスを検討する必要性の主張はきわめて妥当だと考えられる。しかしながら、発表では時間的制約からか、認知神経科学的知見の紹介がかなり割愛されていた。特に右脳と左脳の機能局在の問題は重要で、あらたな研究仮説の生成や実験方法の開発、結果の解釈可能性が期待されるので、今後の参考にしてほしい。

本研究では新たに性別判断課題を開発し使用している。従来顔認知の研究では、当該刺激顔が既知か否かの判断を求めることが多かったが、今回の研究では、自己顔も含めすべての顔刺激が既知となるので、既知性判断課題は使用できない。IACモデルに準拠すると、既知人物の性別判断は、意味情報ノードにもとづいて行なわれると考えられる。したがって、性別判断に至るまでに顔や名前情報に関する一連のプロセスが含まれることになり、それらのプロセスに対する操作変数の影響は性別判断に要する反応時間に反映されることになる。その意味において、性別判断課題は本研究の指標として妥当であると考えられる。なお、性別判断課題を使用する際には、刺激の性別についてカウンターバランスを行なう必要があるが、それらも正しく行なわれている。別の判断課題の適用可能性も示唆されるが、少なくとも本研究に対する性別判断課題の適用は適切であり、あらたな研究課題の開発という点でも本論文は評価される。

本論文では、自他の顔および名前の認知プロセスに基本的相違はなく、自他の違いは量的な程度の違いに過ぎないと解釈している。自己顔認知で認められるMPFCの活性化は、自己顔にユニークというよりも自己認知一般で生じる現象であり、顔認知においては自他の質的違いは認められないと考えるのが妥当であろう。

例えば、第4章で操作した刺激人物の熟知性に関しては、情動などの剰余変数が交絡している可能性が指摘される。本論文は認知心理学に立脚しており、その理論的範疇においては研究として十分成立するのだが、より水準の高い科学論文を目指すのであれば、より広い視点からの検討も必要となるであろう。

以上